

同志社大学

2010年度 卒業論文

論題：就職活動がもたらす第二次社会化  
—就活日記のコレスポネンス分析を用いて—

社会学部社会学科  
学籍番号：19071040  
氏名：丸山 智子  
指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：20,209字)

## はじめに

私は、去年の10月から今年の6月終わりにかけて、就職活動を行った。就活の前までは就活のやり方にこだわった話題ばかりが周りに浮かんでいたため、私は「就活って何！内定を取ることだけに執着して細かいことばかり…」と就活に対して斜に構えていた。そんな私が就活を始め、なかなか乗り越えられない壁にぶちあたり、思考錯誤しながらやっと内定を頂くことが出来たのは、6月の終わりであった。就活が長引いて、苦しむなかで、物事に対する考え方が変わっていった。

「就活の途中くらいから、ぐっと顔つきが変わってくるんだよ」これは、去年の秋、ある教授が、就職活動を始めた私に言ったひとことである。確かに先輩を見ていると、就職活動をされる前と、された後では、ずいぶんと雰囲気が違うよう感じた。特にバリバリと就活に取り組んでおられた先輩や、活動が難航して内定がなかなか出なかった先輩にそういう傾向があるのではないか、と思った。顔つきが変わるとはどういうことなのだろう。就活を終えるとどのような変化があるのだろうか。この論文を通して検証していきたい。

今回は、私自身が就職活動時に付けていた日記を使い、自分の就活を自分自身で分析することにした。一就活生の私が、どんな社会的背景の中で、何を想い、どう行動して、どんな変化が起きたのか、にじっくり向き合ってみようと思う。この論文が「現在の大学生が、進路とどのように向き合っているのか」、「就活によって個人はどんな影響を受けているのか」を記述する資料の一つになり、これからの若者の生き方や、進路の選び方などを理解する上での役に立つことを願っている。

## 1 個人と社会

### 1.1 「我思う、ゆえに我あり」を考える

「我思う、ゆえに我あり」これは17世紀の哲学者ルネ・デカルトが提唱した、哲学史上もっとも有名な命題の一つである。もし自分を含めた世界のすべてが虚偽だとしても、今、自分が世界を虚偽だと意識している、その行動が確実であるならば、そのように意識している自分の存在だけは疑い得ない。“自分がなぜここにあるのか？”を考えていること自体が自分の存在を証明している、という命題である。さて、この命題に対してあなたは思うだろうか？

どんな時に自分自身（我）を意識するか、考えてみた。すると、私が自分を意識するのは、たとえば、大学の食堂にて一人ぼっちでご飯を食べているときや、友達に対して自分がとった言動を思い出しているとき、「今日の服装好き」と言われたとき、雨風がとても冷たくて鳥肌が立ったとき、などであった。これらのように自分自身を意識するときの多くは、自分が自分だけで存在をしている時ではなく、自分以外の何かと関わっているときであった。

クーリーは、デカルトの「我思う、故に我あり」に対してこう主張している。

「われわれの見方からするとこの説明は二つの本質的な点で満足しえないものがある。第一にそれには「ワレ」(I) 意識をあらゆる意識の一部とみる意味が含まれているように思われるのであるが、事実「ワレ」意識とは、単に成長におけるやや進ん

だ段階に属するものにすぎない。第二に社会的もしくは「ワレワレ」という側面をのぞいて、個人的もしくは「ワレ」の側面を強調するのは、一面的もしくは個人的(individualistic)である。そして、「ワレ」と「ワレワレ」とは等しく元来一つのものなのである。」(クーリー『社会組織論』大橋幸・菊池美代志訳 pp29 1970)

つまり、ワレをワレワレと別物のように切り離して認識しているのは成長過程における一段階だけであるので、考えている自分が存在するだけで自分が存在するという証明にはならない。そして、個人は常に他者の存在との関係を持ち続けているので、個人だけを強調してこの命題を捉えようとするのは一面的である、ということをクーリーは述べている。

私が私(我)を意識する時の特徴も、自分が他の何かと関わりを持っているときであった。確かに、例えば誰もあなたのことを「かっこいい」と思っていないのに、自分一人がそう思い続けることは不可能であろう。「ワレ」はデカルトが考えた様なピュアなものではなく、他者との関係性の中にこそ存在するものである。

以上によると、「我思う、故に我あり」という命題は棄却され、「ワレ」はつねに「ワレワレ」の一部として存在していると言えそうである。

## 1.2 社会的相互作用論

ゲオルグ・ジンメルも、個(ワレ)と社会・集団(ワレワレ)は切っても切り離せない関係にあると思った人物の内のひとりである。ジンメルは相互作用という概念を提唱している。相互作用とは、二つ(あるいはそれ以上)の要素が、互いに影響を与え合いながら存在している状況のことだ。ジンメルはこの概念を、自分の社会観の中心に据える。

社会とは何か?という質問を投げかけられたら、あなたはどうか答えるだろうか。社会とは国家だと答える人、社会とは家族や近所のコミュニティーだと答える人、他の答えを思いつく人、いろいろいるだろう。日常用語としては確かに、国家、家族・・・などの永続的な仕組みを伴った組織や集団を「社会」と言うことが多いかもしれない。しかし、国家や家族などの集団は、それだけでは決して持続することはない。そこには、ルールや枠組みしかないからだ。ジンメルは、それらを成り立たせるためには、そのルールや枠組みに収まりつつ集団を構成している人と人同士の細かいやりとりが必要だと伝えている。

ジンメルは、社会を考える時、人と人の相互作用(やりとり)の過程に焦点を当てる。相互作用論の立場に立てば、個人は社会によって影響を受けており、また、社会もそんな個人が集まることで形作られていることが分かるだろう。ワレがワレだけで存在しないのは、この様に、個人同士の日常的で相互的な小さなやり取りが積み重ねられ、初めて社会というものが形作られているからである。(菅野 2003)

## 1.3 社会化

では人間は、いつから「社会の一員としての私」という意識を持ち始めるのだろうか。まさか、赤ん坊がおぎゃーと産声を上げたその時から「この病院の近くには住宅街があって、多くの人が静かに暮らしているから、泣いてはいけない」なんて考える訳はない。とすると、人間は生まれた時すでに、社会の一員としてあるべき姿を身に付けているのではなく、生まれてから時間を経て、それを習得しているのだと考えられる。

アンソニーギテンズによると、社会の一員として、周りに迷惑を掛けないよう行動するようになること、つまり社会化には、段階がある。第一次社会化と第二次社会化だ。第一次社会化は、幼児期と児童期におこなわれる。第一次社会化は、文化の習得がもっとも集中する時期で、人間はこの時期に言語と基本的な行動様式を取得する。そしてこの社会化は、おもに家族を通して行われる。第二次社会化は、児童期後半から成熟期に入るところに生じる。この段階で、第二次社会化は、家族よりも学校や同輩集団、組織体、メディア、職場が多くの影響を及ぼす。この様に、社会化によって、子どもたちやあるいは新たな社会成員は、その社会の生活様式を学習していく。社会化は、一時期に身に付くものではなく、生涯に及ぶ過程である。

また、エミール・デュルケームによると、社会化には以下のような規範性があると言われている。

行為や思考の型は、個人に外在するだけでなく、命令と強制の力を付与されている。自分の意思で同調するときには、強制を感じることはない。抵抗しようとした途端に、強制は事実となって現れる。例えば服装の慣習を無視したら、人々の嘲笑・反感を招く。刑罰に近い効果もある。産業経営者が、前世紀的な工程や方法で労働させることを禁ずるものはないが、敢えてそれをしたら、破産を招くだけである。首尾よく突破できても、闘争は避けられない。最終的に勝ったとしても、反対や抵抗により拘束力は感じられる。

この様に、個人は社会化することによって、その社会の中に適合出来るよう、マナーを身に付けていくのである。

#### 1.4 社会的役割

つまり、ワレワレの一部としてのワレとは、社会化し「社会的役割」を身に付けた個人だということが出来る。社会的役割とは、「特定の社会的位置にいる人が従う、社会的に規定された期待」である。人々は、自分たちの文化の中で社会的位置に向けられた期待（社会的役割）を学習し、その役割をおおむね規定されたように遂行する。

では、社会的役割はどのように身に付くのであろうか。第一次社会化においては、家族特に両親が話し方や食べ方、歩き方、排せつの仕方などを積極的に教えてくれる。しかし、第二次社会化において、その学習は受け身になって身に付くものではない。1.3で既述したように、第二次社会化の担い手になるのは、親などの家族よりも、同輩集団や、組織においてであるからだ。自らが積極的に組織の中で活動をしたり、メディアを通して理解しようとするなど、進行する社会的相互行為の過程で、社会的役割を理解し、身につけるようになるのである。

ここまで述べてきた社会化や社会的役割は、社会に適応して生きていくためにという、どちらかと言えば消極的な意味合いで使われていた。これに対して、GHミードは、もっと積極的な意味合いでの「役割取得」について論じている。では、役割とはなんだろうか。

近代社会における個人は、ありのままの個人として、関係性を気付くことが難しい。たとえば電話で「どちらさまでしょうか」ときかれた場合、わたしたちはどう答えるだろうか。一般的には、「わたしは□□□です」と答えることが多いと思う。では、この□□□

に入るのは何であろうか。きっとその多くは自分の名前であり、学生や会社員ならそれに所属組織をつけくわえる。また「□□の親です」といったように姉妹兄弟親子の関わりや、たんに学生とか客とかユーザーであると伝えるだけの場合もあるだろう。

「わたしは□□□です」にあてはまることばは、相手との関係において自分が担うことになる社会的カテゴリーである。これが、「役割」(role)だ。わたしたちは他者をありのままに認識することはできない。かならずあるカテゴリーを適用して認識する。大学教授として・ナースとして・店員として相手を認識する。これは他者に対してだけでなく自分にも適用される。わたしたちは自分を学生として・患者として・客として類型化図式に当てはめることによって、自分の行為を「あるべき」とされる方向へ近づけていく。これがミードの言う、役割取得である。(野村 1998)

ミードはこのように、自我(私らしきなるもの)は、それ独自で存在しうる実存物ではなく、他の人間とのかかわりあいから生み出され、展開されていくと述べた。つまり、ワレワレの一部となることによって、「□□□として」の行動を身に付けることが出来るので、ワレが完成されていくということだ。

### 1.5 個人と社会との葛藤

では、役割を認知するようになると個人はどんな時でもワレワレの中のワレとして行動できるのであろうか。例えば、電車の中で若者が席に座っていた時、おばあさんが横で立っているのに気付くとしよう。このとき、社会的には、若者は席を譲るべきように見える。若者自身も、自分は席を譲るべきであると、役割を認識しているかもしれない。しかしながら、社会的役割を認識出来ていることと、社会的役割を遂行することの間には、差がある。先ほどの若者が昨日ボランティアでゴミ拾いをしている最中に腰を痛めて、今じっと立ってはいられない状態なのだとしよう。すると、若者は、きっと、譲りたくても席を譲れない。このように、たとえ社会的役割を認知していても、個人がそれに従いたくなくなったり、従えなかったりする場合が出てくる。それがジンメルが言う「個人と社会の葛藤」である。

個人は一つの統一体であり、自己の生を全うするために生きている。他方、社会もまたひとつの統一体としての完成を目指し、個々人に対して社会に貢献できるように要求する。分業が進んだ近代社会では、社会が個人に要求する貢献は一面的なものであり、それが個人の生の全体性と矛盾する時が少なからず出てくるのである。

この対立は、まず自律化した制度としての社会が絶対的なものであるかのように、私たちの「生」に迫ってくるという形でおこる。ルールや諸制度がすでに機能している状況に生まれ落ちる私たちは、そうしたルールの強制力をいったんは鵜呑みにさせられる体験をする。そして複数の社会的役割を担って生きる。そうした役割のひとつひとつは、人間の能力や意欲を丸ごとを要求したり実現したりするものではなく、そうした諸力のごく一部を要求するものが多い。しかも、身に帯びる役割が相互に矛盾し、異なる性格の要求が一個人に複数付き付けられることも多い。さらに、身に帯びている複数の役割同士が葛藤を引き起こすだけでなく、そうした役割が自らの「衝動や関心」と矛盾する場合もある。つまり、自分の中でどうしてもそうした役割を授与することが出来ず、これは〈ほんとうの〉私が果たすべき役割ではないという思いから自由になれない時、人は社会によって自分自身が損なわれているという思いを強くするとジンメルは考える。

## 1.7 就職活動における葛藤

では、話を就職活動に戻し、予想しうる就活生が抱く葛藤について述べていこう。社会的な要因を考える時に、山田昌弘の論を挙げたい。山田氏は著書『希望格差社会』の中で、戦後極めて安定していた個人と日本社会との関係が、1990年以降崩壊したと述べている。個人と社会の関係性を安定させる（不安定にさせる）ものとして職業、家族生活、教育システムの3つの要因を山田は挙げている。1990年までは、その3要因がうまく機能していたため、生活は予測可能で格差は縮小に向かい、人々は希望を持って生活が出来ていた。しかし、1998年以降の日本では、その3つのシステムが上手く機能していないため、将来に希望もてる人と将来に絶望している人に分裂していくと、山田氏は述べている。その中の「職業」について、山田氏は、世界の経済が大量生産から、少量多種生産への変化が浸透したことによって、雇用が不安定化していると説いた。「教育」については、従来のパイプライン・システムが崩れることで、職業へ辿り付けない若者が増えていると説いた。パイプライン・システムとは、学校教育の課程を、繋ぎ合わされたパイプに例えた表現である。高度経済成長期までは、パイプライン・システムが成立していた。パイプライン・システムが成立している社会の中で、個人は、自分の実力にあった将来の職業を見通すことができる。こういう様子だ。まず、教育を受ける子どもは小・中学校という太いパイプに流される。最初のパイプラインの分岐点は、「高校受験」と呼ばれ、本人の選択と適性、そして努力によって、異なったパイプラインに入っていく。その後も細かい「受験」「就職活動」という分岐を経て、特定の職業に押し出されるのである。このシステムの特徴は、無駄な努力をせず、効率的に職業に就くことが出来る点である。このパイプラインは、職業の見通しをつけるだけじゃなく、階層上昇の手段としても機能していた。

今の日本では、このパイプラインに亀裂が入る「漏れ」が生じていると山田氏は言う。私たちのような一般文系大学生も、大学に入ったものの就活に成功せず、「漏れ」の先のフリーターへと流れていくことがある。また、就活に成功してもなお、終身雇用が崩れてきている今の日本の雇用システムの中では、将来の安定性を見込む事が困難である。このような状況において、就活生は、「とりあえず目先のゴールを確保するために頑張る」という気持ちと「頑張ったって、どうせ良い企業に内定ももらえないかわからないし、良い企業に入れたとしても一生安定な訳ではないし、努力は報われないかもしれない」という葛藤をもつとも言えるのである。

実際に就活を終えた私は、あまり上記のような就活生に出会わなかった。むしろ、この様な努力が簡単に報われる時代ではないからこそ、自分にとって何が幸せなのか、何ををもって「報われ」たいか、という点を自己認識しようとしている学生が多かったように私は思う。

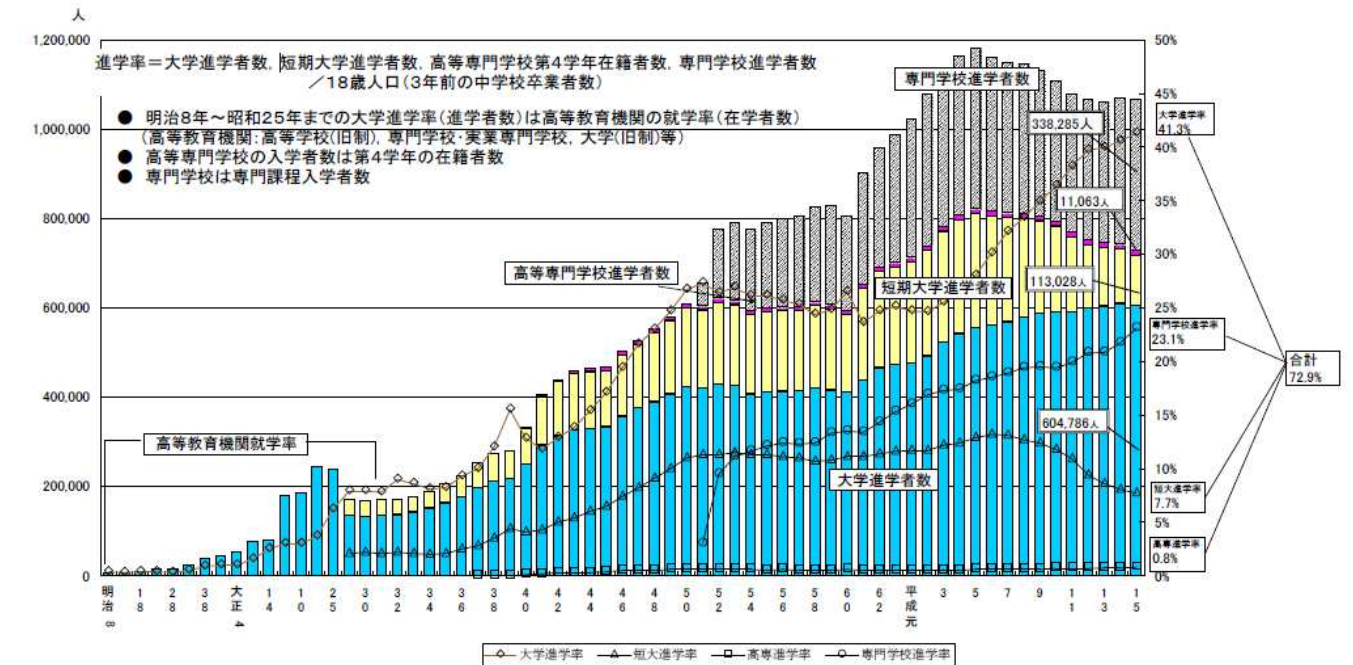
## 2 大学生の進路選択

### 2.1 大学生の進路選択の歴史的背景

大学生の進路選択には、どのような歴史的背景があるのだろうか？歴史をさかのぼると、明治6年学制が発布。明治19年の帝国大学令、21年の官立大学令などによって、大学が設立されていく。この時期に大学に進学する者は、ほんのわずかだった。それゆえ、大学卒業後の進路について資料が多く残り始めるのは、明治40年頃、18歳の人口の内の大学進

学率が、1, 2 パーセントに達するところである。

大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移



(出所) 文部(科学)省「学校基本調査」(昭和25年以前については「文部省年報」)。

(1) 明治 40 年代

この頃は、官立大学卒業生は官界、私立大学は三井・三菱・住友の財閥関係会社というように、大きく進路先が決まっていた。大学卒業生が少数であるため、卒業生は各界へ引っ張りだこで、企業のほうが有名大学の教授へのコネを使って学生を取ることが多かった。学生ではなく財閥以外の一般企業の方が大学卒業生を採用するのに苦労していることが以下のエピソードから伺える。

明治四十五年七月には秋田政一が入社した。秋田は明治四十三年、東京帝国大学機械工学科を卒業し、機械製作に経験があった。…当時一つの製作工場が帝大の工学士を迎えるのは、相当大きな会社でも一年に一人くらいであった。かのような小規模の製作工場の開始に当たって、かくも各方向の人物をみつめたことは、けだし小平(支配人)の抱負の大なることを表したものである。(日立製作所史)。

このころ、一般企業では、丁稚から教育していくという従業員の使い方しか経験がなく、下っ端としても番頭としても即戦力にならない大学卒は、どうあつかったらよいのかとまどうというジレンマも抱えていた。

(2) 大正初年度

大正初年代になると、卒業生たちは官界に行きたがらず、会社銀行に就職を求めはじめた。この頃の入社試験は筆記試験と口述試験であった。当時の採用活動の様子が『鈴木馬左也伝』の中に、こう記述されている。「人を用いるの要は、正直を第一とし、二は勤勉、三は学芸、四は健康であって、いかに学芸優秀であっても、正直でなければ用い難く、…」現在と同じように、この頃から人物重視の採用が行われていた様子が良く分かる。小畑忠良氏（東大法卒・大正六年入社・元住友本社経理部長）の場合は、「日高直次さんの御引き合わせで、一般学生より少し早く特別の御引見を願った。当時は日本経済の勃興期で、大学卒業生は引っぱり風の時代であったから、こちらも気がつよい。先方が試験をして採用するなら此方も試験をして入社してやる（くらいのつもりだった）」というような様子だったようだ。

### (3) 大正十年以降

大正十年後以降は、日本に大戦後初めての不景気が訪れた時期である。この時期には、民間サラリーマンにはまだ実力次第で伸びることのできる見通しがあったから、職業としてサラリーマンが最も魅力的なものとしてフットライトを浴びていた。学校を出なければサラリーマンとしてうだつが上がらぬという風潮が定着してきたため、当時から子どもたちが大学・高専をサラリーマンになるためのメディアと解していたことも想像出来る。

大正後半には、大学生が急増した上に日本の不景気も相まって一流会社を巡っての就職戦線が激化する。「されば、毎年各種学校の卒業生が先を争って三菱家の玄関に雲集し、その採用を希望する。めでたく採用の辞令をちょうだいするものは、まことに暁天の星にも似たくらいである」という風だ。この極度の就職難時代から、就職戦術が発展したといわれている。

### (4) 昭和

昭和40年頃までの就職活動のパターンは、学校推薦方式が常識であり、同時に指定校・指定学部方式が当たり前であった。（少なくとも一部上場企業においては）つまり、この頃学生は企業からの推薦依頼が無い場合そもそも応募資格がなかった。このきわめて閉鎖的な採用スタイルも、昭和61年12月からの平成景気（バブル景気）を機に徐々にくずれてゆく。例えば、平成5年度文系就職人気1位だった東京海上火災保険の採用の推移を眺めてみる。昭和36年当時、同社が採用対象としたのが指定22校に在籍する学生で、学校推薦をうけたものおよび縁故者に限定されているが、昭和57年度実績では全国43大学から採用し、採用学部はほぼ全般にわたる。そして、昭和57~61年の通算採用実績校は65校に達し、昭和62年度は全学部全学科を採用対象としていた。このように、採用の幅が昭和40年以降どんどん開いていき、実質、ほとんど全ての企業で自由応募方式がとられるようになり、指定校無し、および学部学科不問方式が広がった。

### (5) 平成

インターネットの普及以前は、大学の就職課に張り出された求人票を見たり、自宅に送られる企業求人パンフレットなどを見て企業に電話、郵便などでコンタクトを取り、会社訪問、入社試験を行うのが普通だった。インターネットが普及した2000年頃から、大手企業を中心にリクルートが運営するリクナビに代表される就職ポータルサイトに会員登録し、



それらのサイトを経由して企業に受験の意志を表明（エントリーと呼ばれる）したり、会社説明会や入社試験の予約を行うのが一般的になった。現在では、就職サイトにしか求人情報を出さないという大手企業も多く、就職サイトに登録することは、就職活動をする事務系を志望する学生の常識となっている。（尾崎 1967 : 168）

## 2.2 2010年の就職活動

では、現代の就職活動がどのように行われているかについて述べていこう。就職活動はいま、リクナビ、マイナビ、学情ナビといった大手の就活サイトがオープンする大学3年生の10月に始まる。ほどなく就活イベント、企業セミナーが開かれ、2月から3月中旬にかけて大手企業のエントリーシートの提出の締め切りがある。エントリーシート・筆記試験を通過した企業の面接が随時始まり、5月の大型連休前には大手の内定がほぼ出揃う。これが現在の就職活動の流れの概要である。

社会情勢としては、2008年秋のリーマン・ショック以降、企業が大学生の採用を控える傾向が強まった。厚生労働省と文部科学省の調査によると、就職内定率は今年10月1日時点で57.6%に下落している。統計を取り始めた1996年以降、過去最低値60.2%（03年10月1日時点）を7年ぶりに更新するほど、新卒にとって簡単には職を得られない状況となっている。大手就職情報会社「リクルート」によると、来春卒業予定の大学生らの求人倍率は、5千人以上の大企業では0.47倍だが、300人未満の企業では4.41倍で、大企業への就職が困難なことは、数字の上でも顕著である。

次に、学生はどの時期に何をしなければならないと言われているのかについての記述をする。就活サイトのマイナビによると、就活生のスケジュールは、3年の6月から9月が考え始める・触れる時期、つまり、自己分析を通して、自分の価値観や強みの確認を行うと同時に、自分が社会人として目指すこと、取り組みたいことを考える時期である。10月から11月が実際にエントリーしたい企業を見つけるためにも、就活サイトで業界および企業研究を開始する必要がある時期。大規模就職イベントなどにも積極的に参加し、業界・企業・仕事への理解を深めると同時に、人事と接触する機会を得て、就職活動の雰囲気慣れていく。1月以降は、日本中で会社説明会が行われる時期。積極的に説明会に参加する必要がある。午前・午後で3社の説明会に参加する人も。また、大手・人気企業に先駆けて、準大手・中堅企業を中心に選考が行われ、内々定が出始めます。4月に入ると同時に、大手・人気企業各社が面接などの選考を開始します。5月には、内定を獲得し、就職活動を満足のうちに終了する。

## 3 就活日記と分析方法

### 3.1 就活日記要約

まず、私の就活の流れに沿って日記の要約をしようと思う。私が就職活動について意識し出したのは、大学3年生になってからだ。周りの先輩方が内定を得て就職活動を終えようとした頃、次は私の番と言う意識が高まった。その意識を一層高めたのが、当時受けていた2つの授業であった。1つが、社会調査実習という社会調査士の資格の授業で、もう1つがゼミだ。社会調査実習では、就職活動をテーマにインタビューや統計ソフトを使う練習をした。その頃、つまり3年生の頭頃、私は就職活動に対して「みんな同じ恰好して同じこと言って、就職活動ってなんかバカみたい」と思っていた。外から就活生を見

ていると、学生が必死に就活の型にはまろうとしているように見えていて、それが滑稽に見えていたからだ。その思いをよく表わしたレポートがある。2009年4月12日に書いた「就活に関して分からないこと」のレポートである。

働き始めてから3年以内に仕事を辞める若者が多いと言われている。それは学生が、仕事を探す際に内定をもらうことに必死になって、その企業をきちんと理解しないまま応募するなど、日本の就職活動の行われ方に問題があるからなのか。それとも、若い人の我慢する力が減ってきているからなのか。それとも、働き始めてからも働くということや将来設計に対して真剣に考える若者が増えてきているからなのか。

そもそも、日本の就職活動はいつから「リクナビに登録し、スーツを来て合同説明会に行き、エントリーシートを送り、インターネットで試験を受けて、面接を何回もして…」(ただの私のイメージ)という形が一般的になったのか。企業にとって、学生にとって、お互いにとって一番良い就職活動の形は？今の就職活動のやり方が一番良い方法なのだろうか。

この斜に構えた思いは、先輩に就活のインタビュー調査をした後も変わるどころかますますひどくなっていった。先輩方の回答では就活の「やり方」に関してばかりが強調され、就活に対する「想い」がほとんど見受けられなかったからだ。(それは、私が想いの部分を聞き出せなかったせいだということは、今になって分かることである。)

そんな気持ちのまま社会調査実習の授業を受ける一方で、もう1つ力を入れて取り組んでいたのが、ゼミの授業である。ゼミの授業では、グループでのワークショップを通し、社会と自分が関わりあっていることや、市民の働きかけが社会にとっていかに重要かなどを感じ取っていた。3年生の夏休み頃、授業の一環として神戸にあるNPOを訪問したことがきっかけで、私も社会に必要なこと・求められていることがしたい！すべきだ！と思い始める。

こういった背景を持って、私は夏休みが明けた3年生の秋からいわゆる就職活動をしだすのである。初めは、NPOや独立行政法人の職員などを考えていた。社会をよりよくするという公共の部分に関わる仕事をしたいと思っていたからだ。同時に、大学で主催していた一般企業のセミナーにも参加し、いいなと思う一般企業を調べ、どこを受けようか考えていた。また、就活を始めた頃、私が決めていたルールが1つあった。それは、「自分で考え自分で決め自分らしい就活をする」ということ。私は自分の意志を持たないで型にはまった行動をすることが大嫌いだったため、みんなが同じように行動しているように見えていた就活は特に、自分で決めてやるんだという意識を強く持っていた。興味をもって企業を調べていくことはとても楽しく、積極的にいろんな企業のセミナーに参加していた。

2月に入って本格的に自分から企業へのアプローチが始まった。1日1社以上のエントリーシート締め切りがある日もあった。なかなか納得できる文章が書けなかった私は、毎日毎日エントリーシートを書くことに追われていた。自分をどう見せればよりよく見えるのだろう、企業の求めるものは何なのだろう、と必死に考えていた。就活本を読んでやり方を身に付けるとみんなと同じようになって個性が出ないと思っていたため、その種のものには手を出さなかった。しかし一方で、より良いエントリーシートを目指し、ウェブ上の合格したエントリーシートや、人事や就活支援をしている方のアドバイスなどを読んで思

考錯誤を続けた。人に頼りたいと思う気持ちより自分の力で受かりたいという気持ちが強かったため、先輩やキャリアセンターの職員さんにエントリーシートを見てもらうことはなかった。結果、ひとりよがりのエントリーシートはほとんどが受からず、どうしたら受かるのかも分からず、毎日パソコンとしか向き合っていない私はとても元気がなくなっていた。母に「明日は何するの?」と聞かれるたびに、面接等の予定がなく明日も家にいることを伝えるのが辛く、泣きながら「明日のことは聞かないで」と答えるような日々だった。

私が変わるきっかけになったのが、3月の半ば頃友人からもらった一通のお誘いメールだった。先輩がやっている就活支援の団体で模擬面接をしてもらえらしいから、誰か行きませんかという内容だった。どうにかして現状を打開したいと思っていた私は、彼女と一緒に模擬面接に行くことにした。その団体で出会った社会人と内定者の先輩が大好きになり、後押しをもらってエントリーシートを見ていただくようになった。自己PRなどを評価いただくことで、私はこれでいいんだと自信がつくようになった。持ち駒がなくなりモチベーションが落ちたりもしたが、自分のしたいことを見つけてOB訪問なども初め、徐々に選考も進むようになり、悩みながらも活動を続けた。そして6月の終わりごろ、やりたいと思っていたマーケティングリサーチの企業に内定を頂けたので就職活動を終了した。

### 3.2 コレスポネンデンス分析

この論文では、就活日記の分析手法としてコレスポネンデンス分析を使っている。コレスポネンデンス分析 (Correspondence Analysis) とは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素 (クロス集計でいう表頭にある項目) と列の要素 (表側) を使い、それらの相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と、列の要素を多次元空間 (散布図) に表現するものである。各要素の距離が近いほど、関係性が近いということが出来る。

### 3.3 分析データ

今回分析に使用したのは、2009年10月~2010年6月までの就職活動日記である。日記は、そのままコーパスとして用いた。

手順

1) 1次コードをつける

就活日記をセンテンスごとにナンバリングし、一つのログにした。

2) 2次コードをつける

ラインマーカー用いて、ログの主要部位やキーワードを明らかにすることに留意した。

3) カテゴリーとログを集計する

カテゴリーとカテゴリーに含まれたログから、分割表 (クロス集計) をつくった。

## 4 結果・考察

### 4.1. キーワード頻出度

まず、キーワードとログをクロス集計すると添付資料1のようになった。ここから私のログの特徴を見ていきたいと思う。私のログで挙げられたキーワードは、「自分は/が」「不

安・自分なんか」「自分の」「自分で」「納得」「満足」「頑張る」「意味のある仕事」「プライド」「自分が嫌い」「将来」「うまくいかない」「社会貢献」「自信がない」「仕事としてしたいことが分からない」「やめたい」「伝わらない」「何を伝えたらいいか分からない」「周りは周り」「仕事としてしたいことがある」「今」の23個であった。

この23個を出た回数順に並べ替え、表にまとめた。一番多く見受けられたキーワードは「不安」に関するもので、48回登場した。次が、「自分は・自分が」で43回、「自分の」が39回、「自分で」が32回、「納得」が24回、「満足」が14回、「頑張る」が11回、「意味のある仕事」が10回、「プライド」が9回、「自分が嫌い」「将来」「うまくいかない」「社会貢献」が8回、「自信がない」「仕事としてしたいことが分からない」が5回、「やめたい」「伝わらない」「何を伝えたらいいか分からない」が4回、「周りは周り」が3回、「仕事としてしたいことがある」が2回、「今」が1回、であった。

全体順位	キーワード	個数
1	やばい/あせり/もやもや/落ちたらどうしよう/不安/自分なんか	48
2	自分は/が	43
3	自分の	39
4	自分で	32
5	納得	24
6	満足	14
7	頑張る	11
8	意味のある仕事	10
9	プライド	9
10	自分が嫌い・未来将来・うまくいかない・社会を変える/貢献/公共/べき・しな	8
16	自信がない・仕事としてしたいことがわからない	5
18	やめたい・伝わらない・何を伝えたらいいのか分からない	4
21	周りは周り	3
22	仕事としてしたいことがある	2
23	今	1

ここから述べられることは、超就職氷河期と呼ばれる今の時代、学生は将来の進む道を模索しながら焦りや不安を強く持っているということである。それは不安を表すキーワード群の出現回数が最も多かったこと、また、「自分で」「頑張りたい」というキーワードと「自信がない」「やめたい」という逆のキーワードが混在していることなどから述べられる。

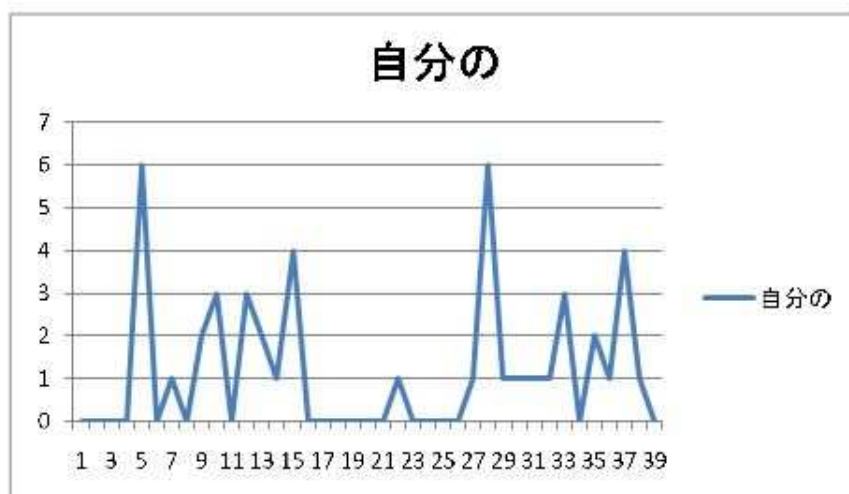
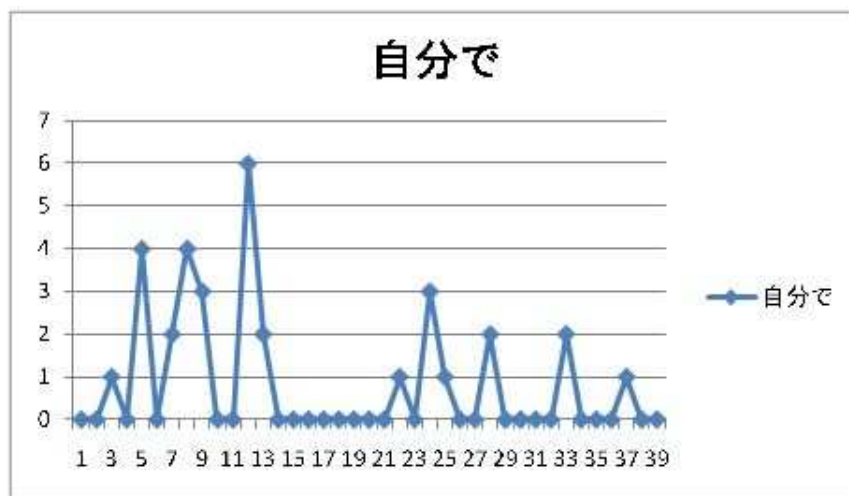
## 4.2 キーワードの特徴

### (1) 「自分で」「自分の」

キーワードを探す中で最も特徴的だったのは、「自分」という単語がとても頻繁に見受けられたことである。「自分」という同じ単語でも、「自分が～」「自分は～」「自分の～」「自分で～」のように、主語を表していたり所有を表していたり自力でやるという意味を表していたりと、文章の中ではそれぞれ異なる役割をしていた。そこで、「自分」に関しては助動詞助詞を含め、3つを別のキーワードとして分析することにした。

次に、各キーワードの出現度を時系列のグラフに変換し見ていくと、3つ面白い発見があった。一つ目は、「自分で」と「自分の」のキーワードについてである。「自分で」と「自分の」の出現回数は以下のようにになっている。表は横軸を時間、縦軸をキーワード出現回数として表に置き換えたものである。「自分で」というキーワードと、「自分の」というキーワードを見比べてみると、「自分で」は、ログ15(3月9日)までが一番多く出現してお

り、ログ 21 (5月8日) までブランクがある。21以降は出現するものの、回数は減少していく。一方で、「自分の」は、ログ 14 (3月7日) で出現が止まり、25 (5月16日) 辺りから出始めるものの、減少している傾向はない。



この結果にどういう意味があるのかを探るため、日記の中からキーワードの後に続く言葉を抜き出してみた。すると、「自分で」の後には「考える」「動ける」「決めなきゃいけない」「決めたい」「しなければ」「見つけなければ」という言葉が続き、「自分の」の後には「仕事」「問題」「答え」「言葉」「力」「働き方」「将来」という言葉が続いた。

これによると、就活を通して私の意識は「自己完結・自己責任」から「社会の中の自分・自己責任」へと変化していったということが出来るだろう。3年半ばまでの時期、私はひとりよがりの就職活動をしていた。(就活日記要約を参照) 自分をオープンに発信して、自分の見せ方や考え方がずれていないかを確かめてもらおうとはしなかった。そうできなかったのではなく、そうしなかったのだ。当時の日記には、「自分で考えて、納得して行動したい」「周りがどうであろうが、自分のことは自分で考え、それに従って行動する」と記述してある。それがさんざん打ちのめされたので、人に頼るという次の方法を取らざるを得なくなったのである。このことは、5月31日のログに顕著に表れている。

進路は、じっくりと自分にとってのベストを選び取ります。私の進路に会社と社会

の都合は関係あっても、それ以外の事は全く関係ありません。自分の人生だもん。自分を軸にしないでどうやって幸せになるねん！っていう。難しいねんけどな。自分は絶対にごまかせへんから。就活においての一番大きな間違いは、多分、ここらへんあったと思う。これはただうちが感じただけやねんけど、大学から社会へ入って行く時の進路選択で、大切なのは、「これからの自分を選ぶこと」じゃなくて「今までの自分を伝えること」やってこと。今までの、受験っていう進路選択とは逆。受験は、「これからの自分」の選択肢を自分で集めて自分で決められた。けどこれからは、自分だけを突き通すなんておこがましいことは出来ないんだなって気付いたのです。例えば自分の人生と言えども、自分だけでは決められへん。社会人ってそういうものかって、そう悟りました。

このように、就活を通して、社会の中で生きていくためには、自己完結してられないことを学びとり、「自分で」という気持ちとの折り合いをつけたのである。

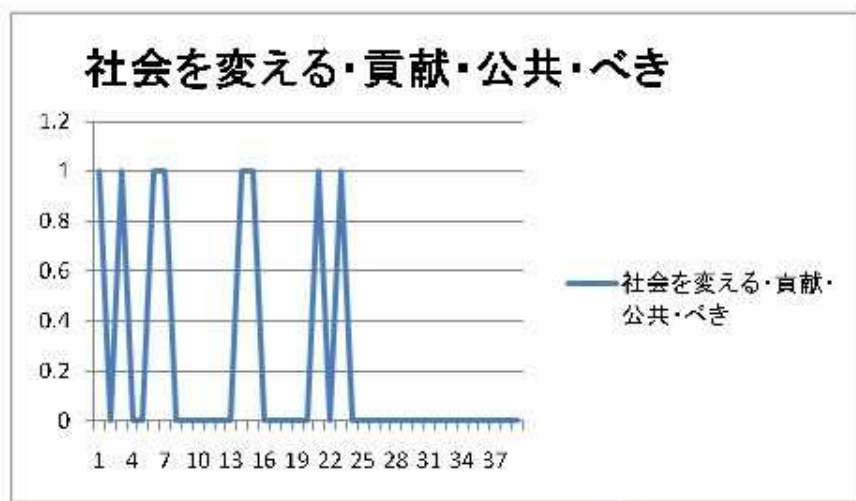
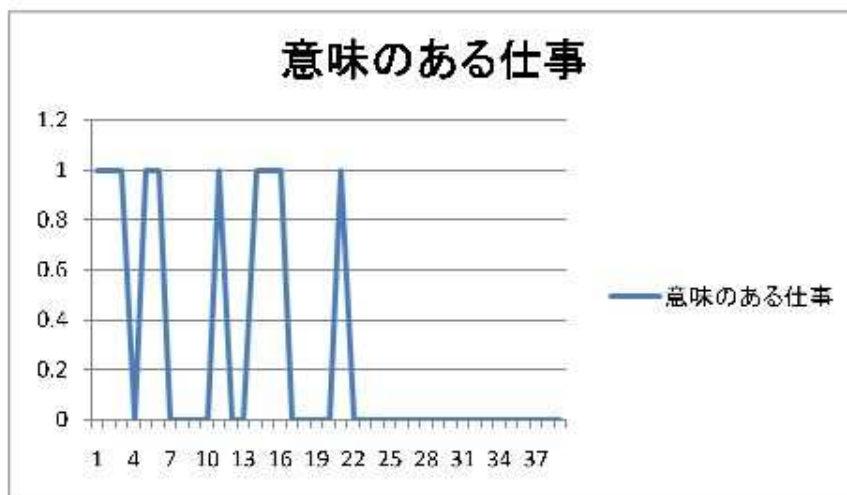
## (2)「意味のある仕事」「社会を変える・貢献」

2つめは、「意味のある仕事」と「社会を変える・貢献」の項目である。これを時系列で見ると、以下の表のようになる。左の「意味のある仕事」「社会を変える・貢献・公共・べき」の登場頻度表を読み取ると、「意味のある仕事」「社会を変える・貢献・公共・べき」は、共に、ログ23・24(5月14日)辺りから登場しなくなっていることが分かる。

2月の初頭のログを見ていると、「社会の中で今足りていないところ＝市民活動っていう意識があった。だから、会社員になるより、そういう公共に関われる仕事に価値があると思っていた」と書いている。自分自身がどうしたいかよりも、社会の中でどうすべきか、自分がどう行動すれば社会がよくなるのか、を考えていた。それは個人的な私の性格でもあり、社会の流れに乗った考え方もあった。しかし、就職活動をして社会の仕組みを知るにつれ、どんな会社のどんな仕事でも、社会の中の誰かに必要とされているからこそ成り立っているのだ、と気付く。そして、漠然と社会のために何かしたいと思っているだけでは、個別の企業に想いは伝わらず、内定を勝ち取ることは出来ないと気付き、「意味のある仕事」探しから、「私のやりたい仕事」探しへと意識が変わっていくのである。その折り合いがついた後、もっとはっきりと自分のやりたいことを見つけなくてはと思いだした時の様子が表れているのが以下のログである。

学生、社会人問わず、魅力的に感じた人って、目標とか、夢とか、何かそういうのに向かって生きてはるってこと。それが外から取ってきた口先だけの様なものじゃなくて、自分自身に素直になって自分の心の中から見つけだした本音やってこと。家に帰ってから、果たして自分のなりたい自分像は？って考えた時に、何か、うちはまだダメだと思った。確かに、将来については行きすぎなくらい考えたんやけど、目標とか夢っていうのは、「過去」「将来」って完全に分離していて、今まではこういうことを大切にしてきたぞ！だから、こういうことを大切にしながら生きていくのが自分らしさや、っていうパターンか、将来こういう人間になりたい、だからこうするっていうパターンだった。「今現在の素の自分の願望」っていうのが、消えちゃってたかなって思う。なんか過去と未来の中に今の自分が体裁のいいように入り込んでるんや

けど、本音ベースじゃなかったかなって、思う。皆に良いように見られたいっていうより、自分自身に向けて、それは現実的にダメでしょとか、きついんじゃないとか、省いてた。その理由は、「今、私は就職活動をしている」という意識だと思う。「今、自分が何をしたい」というのを考えるどころか、むしろ考えへんようにしてた。(今でも、就活を成功させるためにはどっちがいいのか分からんけど。) なんと言いますか、上手く書けませんが、本気で今、したいことの先に、就職活動が設置出来るようにもう一回考えたいと思いました。たぶん、(仕事に) 取り組む前の私たちには、明確で具体的な夢は見つけれないってことと、将来から今を見つけること・過去から将来をこじつけることよりも「今」もっと自分に素直になることだ、と思った。

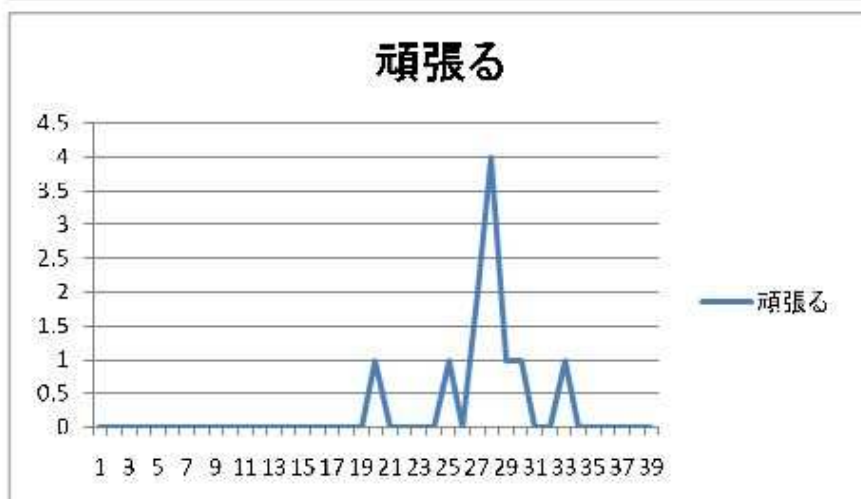
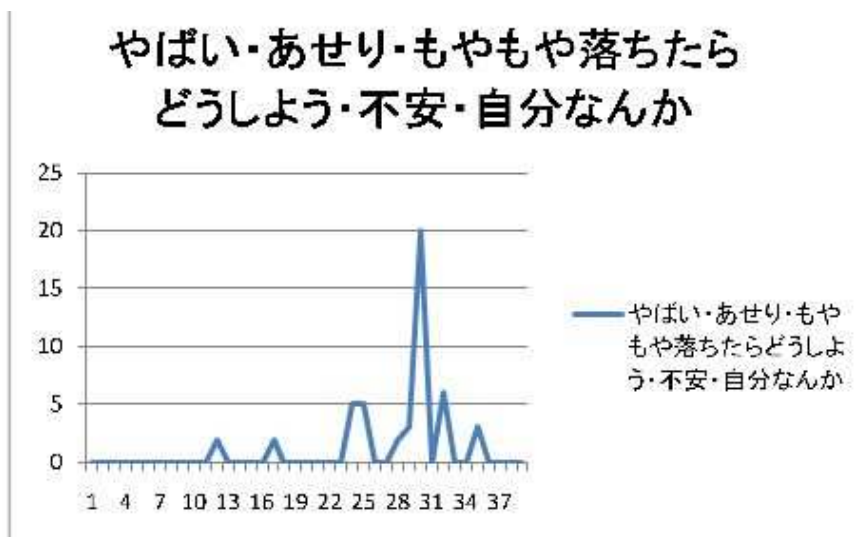


### (3) 「不安」「頑張る」

3つ目は、「やばい・焦り・もやもや・落ちたらどうしよう・自分なんか・不安」と「頑張る」である。この2つのキーワードを時系列にすると以下ようになった。

就活日記概要にも書いたように、私は就職活動を始めた当時、就活に対してとても斜に構えていた。どこかで就活なんてという気持ちがあったし、会社に入ることがすべてだとも思っていなかった。それがちょうど、「自分で」から変わった頃から、「不安」「頑張る」

がでてきた。折り合いを付け、本来の問題と直面したからこそ、不安になると同時に頑張ろうと思ったのだろう。



#### 4.2 コレスポネンス分析結果

4.1.1 にてまとめられたキーワードをコレスポネンス分析した。この表をもとに各キーワードがどのような関係にあるのかをまとめると、大きく以下の3つのカテゴリーに分けられる。

カテゴリー1：仕事としてしたいこと・意味のある仕事・満足・社会貢献

カテゴリー2：納得・自分は/自分が・自分で・自分の・頑張る

カテゴリー3：上手くいかない・自分が嫌い・自信がない・周りは周り

表3は、ログを時系列で見た時のキーワードの移り変わりを表している。点の番号がログの記録番号である。点同士をつなげたものが以下の図である。



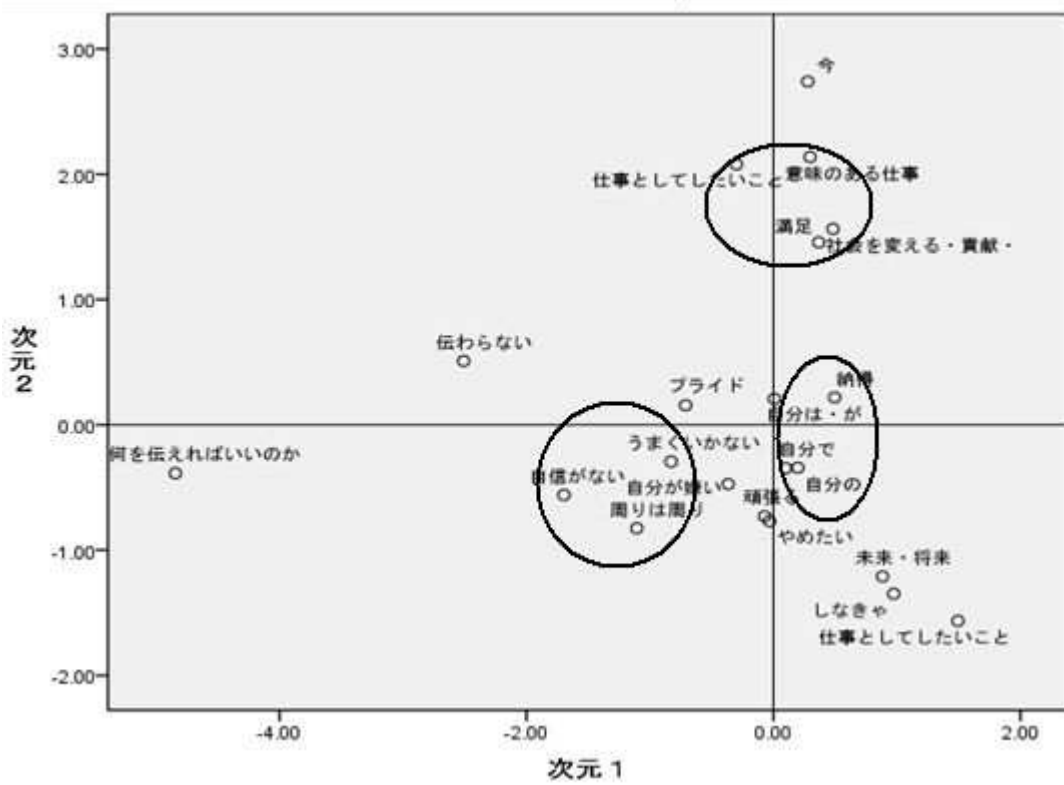
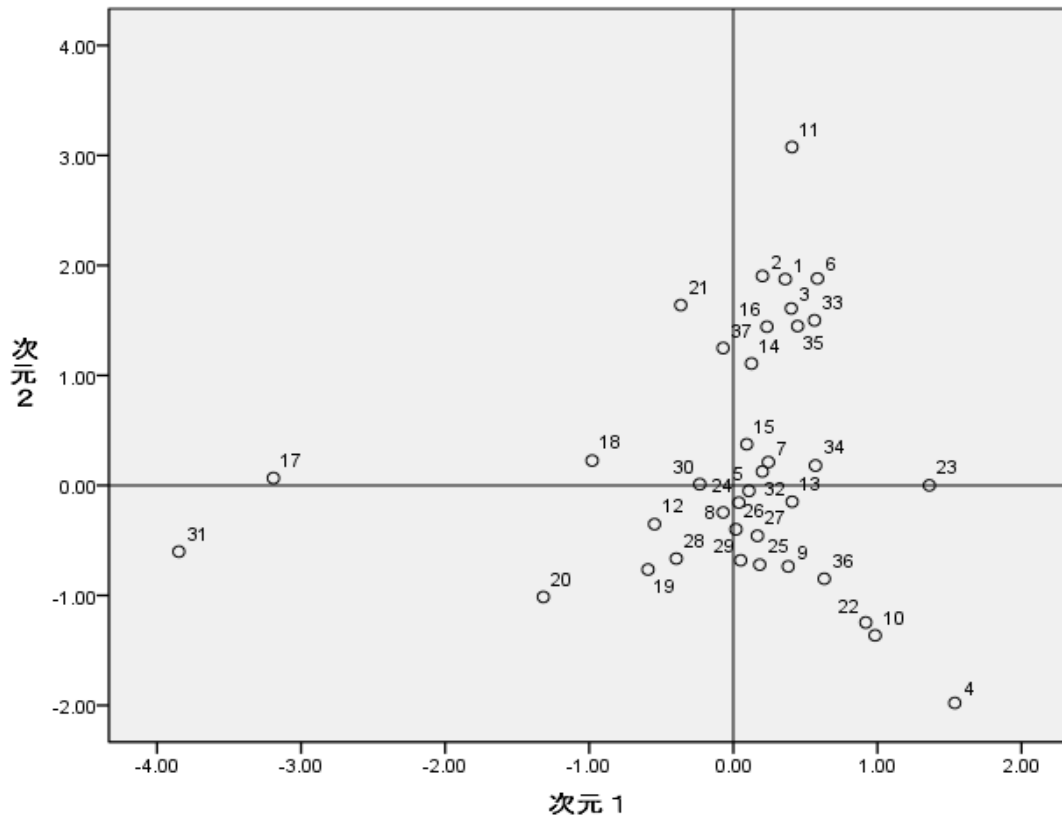
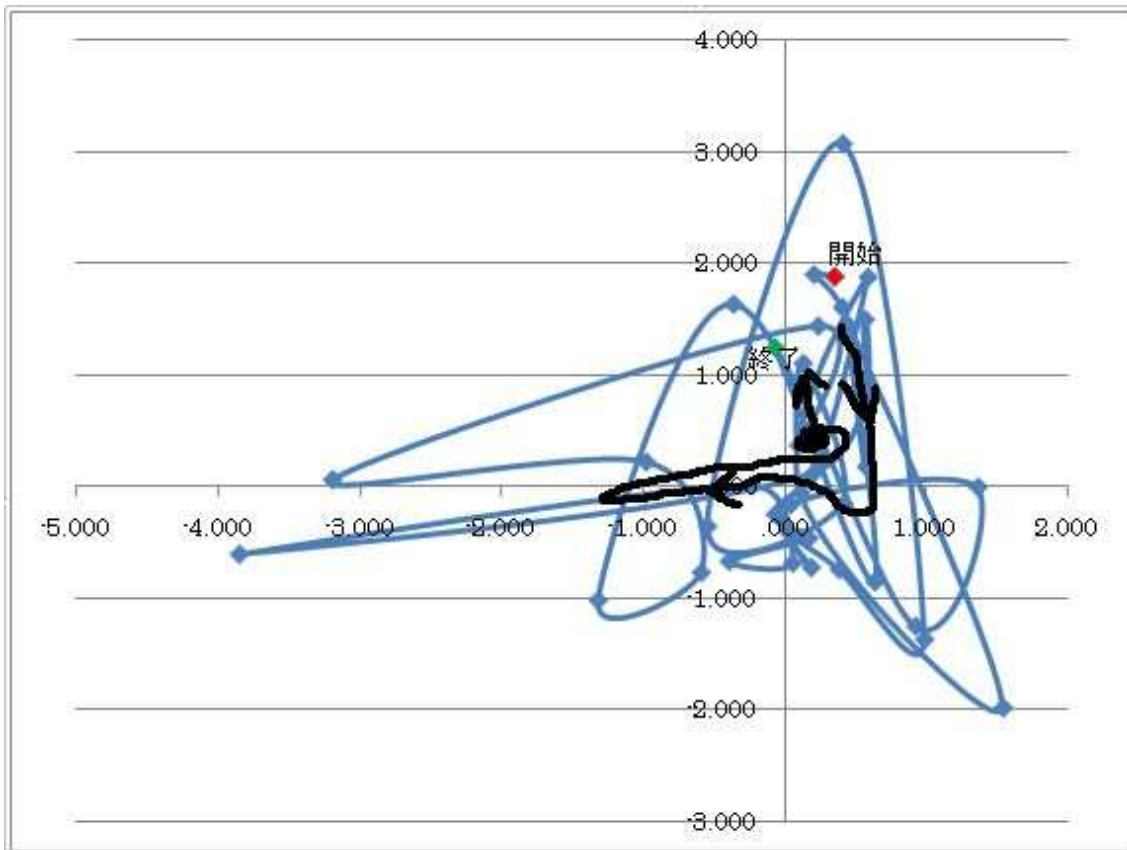


表 2 : コレスポンデンス分析・キーワード 表 3 : コレスポンデンス分析・タイムライン





大きな流れは、直接記入した黒の線を追ってほしい。一の図と照らし合わせると、時系列でどのカテゴリーからどのカテゴリーへ変化していったのかが分かる。

2月中旬までの私の日記内容は、カテゴリー1（仕事としてしたいこと・意味のある仕事・満足・社会貢献）がよく登場していたようだ。2月後半には、カテゴリー2（納得・自分は/自分が・自分で・自分の・頑張る）に移り、その後カテゴリー3（上手くいかない・自分が嫌い・自信がない・周りは周り）へと移動してく。その後、3月半ばにカテゴリー3（上手くいかない・自分が嫌い・自信がない・周りは周り）を抜け出し、5月半ばにカテゴリー2（納得・自分は/自分が・自分で・自分の・頑張る）へ戻ってしばらくさまよう。最終的に内定を得、カテゴリー1（仕事としてしたいこと・意味のある仕事・満足・社会貢献）に移動し終結する。

この結果は、各キーワードから見えてきた私の就活ストーリーを更に補強している。社会の中で、せねばいけない必要があると思う視点を出発点に就活が始まり、自分は？という問いかけをしながら悩み、上手くいかなくなって、今までの自分と折り合いを付けて、本当に自分がしたいことは？という問いかけをし、不安を抱きながら頑張って、納得のいく就活を終えた、という道筋がはっきりと描き出されている。

#### 4.3 諸論と照らし合わせて

では、以上の分析結果を、ミードの役割取得論やジンメル「社会と個人の葛藤」と照らし合わせてみよう。まず、ミードは、他の人々とのかかわり合いの中で、個人は自分の「あるべき姿」を認識して、行動の方向性を身に付けていくと述べた。私の就職活動と照

らし合わせてみる。すると、まず、3月の中頃に就活団体のセミナーに行くまで、私は就活生として企業の人事の方々にとどのように自分をアピールすればいいかのやり方を分かっていた。模索していたが、ひとりよがりであったため、結果が出にくかったと言える。人との関わりを持ち始めて、就活に安定性が出てきたという点で、私の就活は、ミードの役割取得論に当てはまるだろう。

次に、ジンメル「社会と個人の葛藤」について述べよう。ジンメルによると、葛藤は社会的役割を認知していても、個人がそれに従いたくなかったり従えなかったりする時に起こる。身に帯びている複数の役割同士が葛藤を引き起こすこともあるし、そうした役割が自らの衝動や関心と矛盾し葛藤を引き起こす場合もある。私の就活では、3つの葛藤が起こっていた。1つ目が、「自分のことは自分の方法でやりたいし、決めたい」という私の頑固な性格と、少し複雑であるが、「2つ目が、「社会の中において特に必要な部分を担う仕事をしたい」「自分を必要とされたい」という思いと、「

以上のように、企業のOBOGさん、就活団体にいる就活アドバイザーや社会人の方々、また就活仲間との関わりを通して、個人と社会の葛藤を乗り越え、これから一社会人になる就活生としての役割を取得し、内定を得ることができたのである。

## おわりに

この研究は一就活生の個人的な日記を分析したものでしかない。しかし、私の周りの多くの同級生が、就活を終えた後にこう言うのである。「就活は自分自身を見つめるいい機会だった。」こう言った言葉を聞くと、私の経験した社会化は、私だけに当てはまるものではなく、多くの就活生に起きていた現象なのかもしれないと思える。就活を成功して終えることが困難になっている社会情勢で、就活は大学生にとっての大きな壁になった。そのことで、一部の学生は将来の道を閉ざされたかもしれない。しかし、一部の学生にとっては、将来のためにとって取り組んだ就活によって自分の内面に思わぬ成長が見られたのかもしれない。

## 参考文献

- 菅野仁著, 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』 日本放送出版協会
- 野村一夫著, 1998, 『社会学的感覚』 文化書房博文社
- 山田昌弘著, 2004, 『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』 筑摩書房
- 尾崎盛光著, 1967, 『日本就職史』 文藝春秋
- 河野員博著, 2004, 『現代若者の就業行動——その理論と実践』 学文社
- Georg Simmel, 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft* (=1979, 清水幾太郎訳 『社会学の根本問題』, 岩波文庫)
- Anthony Giddens, 2006, *Sociology: A Brief but Critical Introduction*, (=2009, 松尾精文・成富正信訳 『社会学』, 而立書房,)